

令和4年度上大久保中学校だより

上中だより

第4号

令和4年7月1日(金)発行

学校教育目標

「温かい学校 感動あふれる学校」

さいたま市立上大久保中学校

〒338-0824 さいたま市桜区上大久保861-1 TEL855-3901

<http://kamiokubo-j@saitama-city.ed.jp>

負けることの尊さ

けんもつ ゆきひこ
校長 監物 幸彦

どんよりした梅雨空の下、七変化するあじさいの色が衣替えをした生徒の白いワイシャツとともに、鮮やかに輝いています。6月4日から約1週間、3年生にとっては最後の大会となる学校総合体育大会が開催され、多くのドラマと共に、子どもたちの輝く笑顔と、そして悔し涙を流す姿に心を打たれました。毎年梅雨時に行われるこの大会ですが、負けた子どもたちの涙が雨となって降ってきてるかのようです。

親であれ教員であれ、子どもが負けたり、大きな失敗をした時にどんな言葉をかけてあげれば良いか大いに悩みます。皆さんだったら、どんな言葉をかけるでしょうか。(かけたでしょうか。)私がよくかける言葉は、ありきたりですが「お疲れがんばったね。」「負けたことが人を強くするんだよ。」「結果ではなく今までがんばってきた過程が大切。」などです。また、だまっていて「相手が話し始めるまで待っている。」こともあります。

「負けること」あるいは「失敗すること」は決して恥ずかしいことではありません。試合での「負け」は「ルール上の負け」であって「人生の負け」ではありません。優勝チーム以外はすべてのチームが負けることとなります。人は勝ち続けることはできません。ほとんどの人はどこかで負けます。負け続けるつらい日々を過ごすときもあります。人生に「負け」はつきもの。ときにその「負け」は、「失敗」という言葉に置き換えられます。

大会で負けてしまって悔しい思いをした人に、相田みつおさんの「負ける練習」という詩とその解説文を紹介します。

(とても長い詩なので、全文は校長室横の掲示板に貼ってあります。)

「受け身 負ける練習」 相田みつを

柔道の基本は受身

受身とは投げ飛ばされる練習

人の前で叩きつけられる練習

人の前でころぶ練習

人の前で負ける練習です。

つまり、人の前で失敗をしたり

恥をさらす練習です。

(中略)

長い人生には

カッコよく勝つことよりも

ぶざまに負けたり

だらしなく恥をさらすことのほうが

はるかに多いからです。

(中略)

若者よ 失敗を気にするな

負けるときにはさりと負けるがいい

口惜しいときには「こんちくしょう!」と

正直に叫ぶがいい

弁解なんか一切するな

泣きたいときには思いきり泣くがいい

やせ我慢などすることはない

(中略)

若者よ 頭と体のやわらかいうちに

受身をつんと習っておけ

受身さえ身につけておけば

何回失敗しても

すぐ立ち直ることができるから……

(中略)

そして負け方や受身の

ほんとうに身についた人間が

世の中の悲しみや苦しみに耐えて

ひと(他人)の胸の痛みを

心の底から理解できる

やさしい暖かい人間になれるんです。

(後略)

解説文

私は自分の過去を振り返ってみる時、人間というものは、失敗と恥のかき通しじゃないかなあ一と思うんです。つまり、自分の希望や思い通りになったことなど一度もありませんから。本当はそれが当たり前ですね。自分の希望や思いが通らぬのが人生であり、世の中です。自分の思いが通らぬということは、ことばを変えれば〈負け〉ですね。自分の思いが通って、カッコよく勝つことなどはごく稀で、ほとんどは〈負け〉になる。それが人生じゃないかと私は思うんです。それならば、当たる確率の少ない〈勝ち〉の方へ的を合わせないで、確率の圧倒的に多い〈負け〉の方へ合わせておくほうがいいんじゃないか、というのが〈負け〉の人生ばかり歩いてきた私の持論です。だから『負けることが人生の基本だ』と性根をすえるんです。そのためには、子どものころから、負ける練習、失敗の練習、恥をさらす練習をたっぷりさせておくことです。そして、負けに強い人間、失敗に強い人間、恥をさらすことを恐れない人間に育ててやるのが、子どもの一生を通しては幸せなのではないかと思うのです。

ネットやテレビを見ていると、実業家や芸能人、スポーツ選手など成功してキラキラ輝いてる人ばかりで、(もちろんその裏には、大変な努力や苦勞があるのですが……)日々劣等感を感じることもあります。自己肯定感が低い子どもが増えているのは、その影響があるのではないかとこの見方もあります。相田みつをさんの詩を読み直して、私自身あらためて勇気と希望がわいてきました。